

二〇二五年度奨学生 総評 立花開

奨学生投稿の皆様、お疲れさまでした。今年度から仕様が変わり、我々も戸惑う瞬間はありましたが、新しくなったからこそ出会えた作者も多くありました。

作風の変化は時間の経過と共に必ずあるものですが、そこも含めて改めて読むことができたので、良い時間を過ごせたと感じております。

どの作品も素晴らしかったが、私が特に心惹かれた投稿者は福山ろか氏、奥井健太氏、高田皓輔氏の3名である。

福山ろか

①連写する集合写真銀杏散る②軽鴨のまだいるような夜の池③感情に飽きて火鉢の静けさよ④ヘッドホン外して冬の星を増やす・封筒の窓しゃかしゃかと春きざす・はらはらと錯視のように秋の雨

福山氏の作品は、感覚に「果て・端」があるところが面白い。作者の区切る、という表現の根底には、視る意識が流れている。連綿と続く時間も、抱いてしまったときから抜け出せない感情も、作者自身が「果て」を作り上げ、「端」を見つける。

①一瞬を切り取る写真だが、連写によって銀杏だけがストップモーションのように時間を現していた。②目の前の池は流れる時間の中にあって、もう軽鴨はいない。けれど記憶の中、瞬きをした眼の中にはまだ池に軽鴨がいる感がしている。これからも、その軽鴨はそこから飛び立たず、更新されることのない記憶の端に留まり続ける。③どんな感情だったのかわからないが、単純に飽きたのではなく考え疲れた果ての心だと感じる。音や動きではなく熱によって空間を揺らす火鉢の存在は、静かだが大きい。考え尽くした果ての、静かで熱い心。④月次でも取り上げた。こちらは、逆に果てや垣根をなくした作品。耳で星を見る感覚。ヘッドホンを外した静寂の中で、初めて気がついた星は音が聴こえるような美しい光だったのだろう。

奥井健太

①風を追う首輪に慣れて来た犬が②爽やかに話す歌うも同じ口③また同じアプリを開く春の草④たんぽぽを吹かせて貰う間柄・夏野よこれは／スクロール後の世界です・猫も人の言葉分からず実南天・焼芋屋を次々抜かす陸上部・飛行機に花火の音の届かずに・ゴキブリを潰して人に会わない日・数式が定規に透けて風薫る

奥井氏の作品は、乾きと湿り、明と暗、対極にあるものが混ざり合って1つになっている、唯一無二の温度や湿度を感じる。リアルで綺麗じゃない、「今」という感覚の中に詩があるからだろう。

①他者に首輪を着けるのは人間だけだ。人間は首輪に慣れることなど出来ないくせに、社会の中で生きさせるといふ名目で押し付けている。風を追うという自由の中にいるように、縛られている。結句「犬が」には、種族の違いを吐き捨てるようにも読める冷たさがある。だが人間は、犬よりも苦しい見えない首輪を着け合っているのかもしれない。②歌も言葉も「同じ口」から紡がれる、という発見。だが爽やかに話す、という明るすぎる限定に、その裏の影を見てしまう。歌も言葉も同じ口から、けれど殺す言葉も同じ口から出てくる。③何度も開くアプリがあるのだろう。何となく見てから閉じ、次の瞬間もう一度意味もなく開いて自分の行動のおかしさに気がつく。人間の無意識の習慣と欲に負ける哀れさを切り取る。④「今」に対するドライな感覚の作品も多いが、想像を膨らませる美しい作品もある。近くで呼吸を出しても良いのだから近い間柄に感じるが、基準がわからないのでもしたら遠いのかも知れない。分からないからこそよい、という儚さ。

#### 高田皓輔

①思いきり着膨れしたらめくるめく／冬毛のあなた　あなたの冬毛②涙腺に似た働きの糸蜻蛉③同じくらい幸せじゃないで／いてほしい／中央分離帯のさびしいみどり・たまごから／産まれたように笑うひと

高田氏の作品は人間のエゴがむき出しになっていて、可愛くてかわいそう、と感じるところが非常に良い。可愛くてかわいそうだけれど、ここまでむき出しなのは、表現者としての強さであると明言できる。

①月次でも取り上げた。「冬毛のあなた　あなたの冬毛」という繰り返しに、あなたへの執着と愛が感じられる。むき出しであるという、無垢さと無防備さ。ある種の愚かさでもあるのかもしれないが、それを持ち続けることの方が難しく苦しいものだ。無垢の強さ。②自分が泣けないときに、代わりに泣いてくれる存在は世界に必要なである。つい、ついと飛ぶ糸蜻蛉の姿は、涙が落ちる様にも似ている。もしくは、その時眺めていた作者の心が泣いているのかもしれない。③不幸は願えないところや、「幸せじゃないでいてほしい」という言葉が幼稚なところがかわいらしい。不幸は願えないが幸せも願えない。「さびしい」という一番どうしようもできない心をむき出しにする。

秋山颯汰朗（乾電池いっぽんで点く秋の月・チェロの弓立てかけたまま滅ぶ星・骨壺の底にありそう粉薬）、大西　美優（ひやしんす　すきのかわりにいうすてき・ねむの花酔えば楷書になる声の）佐藤　知春（またね　肋骨のような白い駅で・オフィーリア貴女顔だけ沈まない）川上　真央（愛想笑い自覚するとき／胸にあるみるくぷりんが／身震いをして・ペーぐると言うとき／やぎとおそろいの／くちびるを陽に差し出している）、青木　菓子（てのひらで半濁音を羽化させる・黄ばんだりするのだろうか／たましいも）

上記5名の作者も注目して見ていけたらと思う。